

二〇一三年三月一〇日

野遊びに飽きて頬張る握り飯
親株を遠巻きにして名草の芽
赴任地は海沿ひの町燕来る
五百齡触れてあたたか椋大樹
芹青き水に揺られて寂光土

お手玉の転がつてをり雛の間
重箱の中は宴や豆ひひな
一輪車手を振り進む春堤

二〇一三年三月八日

酔いどれの千鳥足なる路地
吊橋の足下に激つ雪解川
地の温み残る夕餉の落の臺
幾度も戦禍くぐりし古雛
芹洗ふ泣く子を足に絡ませて
芥なきみたらし川へ椿落つ

山吹の枝垂れ一溪明るうす
大玻璃に展けて京の山うらら
鉋くづ東風に飛ばさる寺普請
河口から始まる春の月の道
足掛けて飛び乗る小舟風光る
うららかや焼き立てパンの並ぶ店

二〇二三年三月六日

転んでは起こす自転車山笑ふ
おんぶの子伸ばす右手に風車
コンビニに鞦ゆるめる老遍路
玉垣の狭しと宮の梅盛る
遺さるる身の哀しさよ鳥帰る

海風に幟はためく梅の山
逃げ水を追うて地団駄踏む子かな
マイカーを洗ふ背中に揚雲雀
藁舟のくるりとまはる流し籬

一〇三三年三月四日
藁舟のくるりとまはる流し籬
鞆振れば小石がひとつ山笑ふ
立話して満開の梅を見ず
さざ波の夕日揉みゐる春の川
黒猫と見しは陶器や花ミモザ
流さずに家苞に買ふ流し籬
春眠のつむじを見せて夢見顔

む 明 な は 満 ひ あ 素 素 千 た セ 素 か ひ
日 つ く の ひ し 秀 秀 鶴 子 す か え る
べ 香 き 子 天 と る 秀 秀 鶴 子 す か え る

毎日句会みのる選・二〇一三年三月一二日